

辰^{たつ}

池^{いけ}

の

竜^{りゅう}

むかしのことです。

北尾村は、米づくりでくらししていました。でも、来る年も来る年も八月になると、田んぼの水がなくなってしまうのでたいへん困っていました。村人たちは、寄るとさわると、空をながめては、

「今年も、おしめりがないのう。」

「このまま雨が降らんと、稲がもたんなあ。」

と、ため息まじりに、天気のことを話題にしました。困った村人たちは、庄屋さんの家に集まって、

「こんどは、天焼きやっても、雨は降ってくれんなあ。」

「なんとか、雨を降らせることはできんもんかな。」

と、相談しましたが、みんなじつと考えこんでしまいました。なかなかいい方法は、うかびません。みんなだまりこんだままです。

と、突然、

「どうじゃ、辰池には竜が住んごるげなが、その竜にたのんでみたらどうだ。」

と、ひとりのお年寄りがいいました。考えあぐねていた村人たちは、

「それは、ええ。竜は、雲を呼ぶといわれとる。」

「おれがれのじいさんは、子ども
のころ竜を見たげなぞ。」

「あかんでもともどだ。ひとつや
つてみようか。」

「そうだ、そうだ。そうしよう。」
と、にわかには話がはずみ出し、辰
池の竜をお願いすることになりま
した。

その次の日、朝早くから村人総
出で、竜の大好物といわれるおこ

（赤飯）



わをたきました。そして、それをおひつにつめ、酒だるをそえて、辰池まで運びました。きょうも、雲一つない、かんかん照りのいい天気です。村人たちは、

「どうか、恵みの雨をお願いいたします。」

と、おいのりしながら、持ってきたおひつと酒だるを池にうかべました。

池にうかべたおひつと酒だるがだんだんと流れて、池の真ん中あたりまでいったころです。どうでしょう、今まで青一色だった空に、黒い雲がぼつんと出たかと思うと、それがみるみるうちに空いっぱいになり、ポツリポツリと雨が降り出しました。やがて、強い風とともにはげしい夕立がやってきました。村人たちは、ずぶぬれになるのもかまわずに、おどりがたがって喜びました。そのとき空からの稲光いなびかりにこたえるかのように、ひとすじの水の柱が空にまいるようになりました。この時、村人の何人かは、水の柱の中に、竜のうろこの光るのを見たということでした。

北崎地区に伝わっている、神田小学校の西にある辰池にかかわる話です。

辰は竜で、竜の住むような深い池という意味から辰池と呼ばれるようになりました。市内には、いくつもの辰池がありました。